

## —物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

### 1. まえがき

最近の我が国をとりまく経済環境は、バブル経済の崩壊の後遺症からの脱却かと思われたが、外国大企業の経営破綻にまきこまれ、今や世界同時景気後退のなかで経営危機、金融危機をまねいて、結果としてリストラに名をかりた人員整理となり大不況を創出してしまった。

それは、少子高齢化による労働コストの上昇による国際競争力の低下で国内工場生産から国外工場、いわゆる海外工場生産へ移転による国内産業の空洞化ともかさなり、移転先の海外新興国の技術の向上による追いあげもあり、結果としてかつての経済優等生の日本は全く想像のつかない雇用不安定の経済劣等生となってしまったのである。

特に、規制緩和による労働環境は雇用不安定な非正規社員の増大、いわゆる派遣社員の占める割合が増加となり、本来は労働者ボスによる中間搾取禁止を考慮して常用雇用型派遣であったものが単純労働が多い登録型派遣が増えたことも正規労働者に比べ人員整理の対象となりやすい不安定雇用者が増大したこともその要因である。

かつての我が国の雇用形態は、年功序列と終身雇用で会社の業績や株価等の動向に左右されない安定した信頼で経営者と労働者の関係はなりたっていた。

それは、結果として労働者の信頼が会社に対する帰属意識、愛社精神へとつながっていた。

技術や伝統が長期雇用システムで受けつがれ会社が発展しつづけられたと考えられる。

経営者はグローバル化の世の中だからこそ我が国の歴史的風土から生まれた「和の精神」のもと

づく仏教倫理哲学を忘れてはならないと考える。何時くびを切られるか解らない不安定な会社勤めよりは、給料が安くても安定した雇用関係が望ましく、「思いやり」と「心くばり」と「気くばり」があれば、日本人は不況や恐慌に耐えうると考える。

長期の安定した雇用関係を考え実践することが企業と労働者の信頼を高め将来の発展につながると思われる。そこで、「経営の五原則」で人と心を考え理解し、「四無量心」で人の上に立つ経営者の生き方を考え、「五見」で物の見方、考え方を考えてみることにしたい。

特に、経済大恐慌のなかで我が国の歴史的風土のなかから生まれた仏教倫理哲学を今一度、学び考え振り返ってみることも大切だと思う。

雇用の不安定は決して企業の力にはならない。

### 2. 「経営の五原則」を考える

経営に対する考え方の基本として、「経済の三原則」として「人」、「物」、「金」が重要だといわれてきたが、時代の変化にともない今やこれに「情報」と「時間」が加えられ「経営の五原則」といわれる時代になった。

そこで経営を考え実践する場合の「経営の五原則」のそれぞれの基本要素について考えてみたい。

「経営の五原則」とは

#### 1) 「人」

この場合の人とは、権利義務の主体たる人格を有する人、いわゆる経済活動をするために必要な人才（才知ある人）であり、役に立つ能力を有する人。

#### 2) 「物」

一般に物とは対象として特定の言葉で示さず漠然と表現しているが、経営という経済活動における物として考えた場合、経営をする場合に必要と思われる物體的な施設等や物質的な資原等を含むと考えられる。

#### 3) 「金」

この場合は、経営のために必要な資金である。

#### 4) 「情報」

経営活動における判断を下したり、行動を起したりするために必要な、種々の媒体を介しての知識、ニュース・ソース等をさす。

#### 5) 「時間」

この場合の時間は、たくわえられない時間を知覚し如何に有効に活用するかという経済活動における事象の生起順序、初めと終りなどを主観的に把握し、無駄を除くこと、いわゆる無駄金を使わない時間の有効活用をさすことを意味する。

以上の「経営の五原則」のなかで「人」だけは別格

著者：広島大学生物生産学部講師  
元近畿大学産業理工学部客員教授  
日本禅画家協会名誉理事  
中国少林書画院名誉教授  
法号位 法印 禅画位 奥伝  
青木伸雄  
(野風生)  
雅号 樹泉